

【特別編①】

関東大震災と栄一

大正12年9月1日。大きな揺れが関東を襲ったその時、栄一は東京兜町にある事務所で執務をしていました。無事自宅に着いた栄一は、甚大な被害を知るにつけ、浮き足立つ周囲をよそに、「食料は間に合うのか、治安は大丈夫か」といつ人々の生活に視点を定めま

す。栄一は早速周囲と相談しながら、内田臨時首相、警視庁などに對し、コメの被災地への搬入と戒嚴令の公布を建言します。折りしも加藤友三郎首相が8月24日に急逝していたため「首相不在」という異常事態下でした。

この事態と84歳という年齢を家族は心配し、郷里血洗島に避難することを提案しました。しかし栄一は言葉を遮り「わしのような老人は、こういつとときにいささかな



▲大正12年11月埼玉県人救護団バラックにて（個人蔵）

りとも働いてこそ、生きている申し訳が立つようなものだ」と即座に返しました。そして実際、ここから栄一の活躍が始まり、日夜奔走することになります。

9月3日には山本権兵衛内閣が成立し、11日には栄一を中心に「大震災善後会」が発足します。この組織の優れた点は、救済部と経済

部の二部制を敷き、被災者の救済ばかりでなく、経済復興まで視野に入れた点でした。栄一は国内での精力的な義援金募金活動のほか、13日にはアメリカにいる知人にあてて電報で支援を依頼します。

栄一は9月22日の談話で、こう語っています。「被災者をしてこの際一日も早く安堵せしめ各自その職に就かしむることに導くのは最も急務である」。社会が動揺し続けている中、早くも被災者個人個人の生活の安定に目を向けます。

現実を常に直視し、いかにリーダーは行動すべきか。関東大震災における栄一の迅速な行動、その後の帝都の復興は今後の指針となるべきものです。

物語の手引き

『大震災善後会』ってなあに？

栄一の呼び掛けで結成され、財界幹部と貴衆両議員を中心とし、被災者の救済と経済復興に当たる組織です。

震災直後、新聞社などの代表者を集め、会の趣旨を説明し義援金募集への協力を呼び掛けました。また、地方の実力者や

実業家にも勧誘状を発送し、さらに全国の商業会議所に人を派遣して、懸命に義援金を集めました。これとは別に政府の救済事務局のほうには、アメリカの実業家から、栄一の要請に応じて義援金が送られてきました。

大震災善後会に集まった義援金は、被災府県や市、さらには社会事業団体などに配られ、被災者の救援に充てられました。

※登場する人物について、歴史上の人物としてその敬称を略します。また、年齢については、当時の通例に従い数え年の表記とします。

キラリ熱・中・時・間



吉田光枝委員長

みんなの幸せを願って…

～深谷市赤十字奉仕団～

3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震。深谷市赤十字奉仕団（以下「日赤奉仕団」）吉田光枝委員長は、テレビ越しで被害の大きさがくせんとする一方、「今こそ奉仕団が動くべき時！」「と思ったそうです。

日赤奉仕団は、早速、市内各所で精力的に街頭募金を実施。福島県からの避難者を受け入れているもくせい館では、カレーなどの炊き出しを行いました。

「口いひから、災害の際にはすくなくとも動き出せる支度は整っています。何かできないか、居ても立ってもいられませんでした。」

吉田委員長の言葉からは、ボランティア活動の原点を感じることができます。

日赤奉仕団は、市民からなるボランティア組織で、現在、団員数は466人を数えます。

災害時に、支援活動を行う一方、平常時には、防災訓練時の炊き出しや献血会場での補助な



▲被災地で元気に羽ばたけ！地道な補修作業が続きます

どを行うほか、友好都市の奉仕団と「災害時の相互応援に関する協定」を結び、日ごろから連携を深めています。

新潟県中越地震の時は、南魚沼市の奉仕団と連携して、炊き出しやがれきの撤去、清掃など、被災地で多くの支援を実施しました。

5月5日、今回の震災で被災した友好都市田野畑村の空に「復興へのメッセージ入りこのぼり」が飛ばされます。少しでも心に元気を取り戻してほしい。日赤奉仕団の活動は、心の活動なのです。

夫婦道のススメ

「ありがとう」を心に



矢内利雄さん（79歳）
文子さん（75歳）

岡にお住まいの矢内さんご夫妻は、結婚56年目。出会いは、駅員をしていた利雄さんが文子さんに声を掛けたことがきっかけ。文子さんは、利雄さんのまじめな人柄にひかれたそうです。常に一緒にいるご夫妻の楽しみは年に2回の旅行。「きれい好き」なお二人は、掃除やアイロンがけなど、お互い任せるところは任せ「ありがとう」と言葉を掛け合って、気持ち良くやってみようとか。夫婦円満の秘訣は、隠し事をせず、何でも話し合うことだそうです。

ありがとうの手紙



最優秀賞
中学生の部
美しい街を

支えてくれる人へ
石川 瑛子さん

南中学校2年（現3年）

その人との出会いは休日の早朝、部活に行く途中だった。道路のゴミを拾ったり、植え込みの雑草を取ったり、花の手入れをしたり。こんな人がいてくれるから美しい街が保たれているんだと初めて気づいた。挨拶も交わしたことがないけれど心から「ありがとう」の言葉を伝えたい。私の住む街は、こういう人に支えられている。

いつか、あの人と一緒に作業ができたらと思う。そして、「ありがとう」って言いたい。近い将来にきっと…。